OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞溝口宏平『超越と解釈』
Author(s)	鷲田, 清一
Citation	カンティアーナ. 1993, 24, p. 43-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66716
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

溝口宏平『超越と解釈』（晃洋書房、一九九二年九月刊）

鷲田清一

序　章　ハイデガーと解釈学的哲学との関わりをめぐって
第一章　哲学としての解釈学の生成と展開
第二章　解釈学的哲学の基礎と課題
第三章　事実と解釈――「事実性の解釈学」の理念とその射程
第四章　現代解釈としての技術論――後期ハイデガー技術論の解釈学的究明と位置づけ
第五章　超越論的主体性と超越の次元――フィヒテからハイデガーへの道
第六章　歴史から歴史を超えるものへ
第七章　実践と理解――実践の問題への解釈学的接近の試み
付　論　存在問題のために

本書は、著者がここ十年間に執筆した〈解釈学的哲学〉関連の論文を中心に編まれた論文集である。著者自身は「まえがき」で、ここに収められた諸論文を「現代における解釈学的な哲学の可能性をとらえなおそうとした試みの軌跡」であると総括したうえで、こうした試みが取り組んできた課題をさらに次のように限定している。

「ガダマーによって代表されるような現代の解釈学的哲学と、解釈学に哲学としての資格を付与するうえで決定的な役割を果

たしたハイデガーの思想とのあいだにみられる継承と乖離の関係が、現代における哲学の可能性を考えるうえで避けることのできない問題として浮かび上がってきた……。優れて現代的な性格を帯びる解釈学的哲学は、みずからの哲学的基礎をハイデガーのなした人間的現存在の分析に或る面で負いながらも、彼の思惟の主題である存在への問いをそのまま継承するということも、またそれに対して正面から批判的な反省を加えるということも今までなかったように思われる。そのため、理解と解釈という思惟の形式的な側面の構造分析に重心をおく解釈学的哲学は、ややもすれば哲学的思惟の内実を喪失していく傾向にあったことも否めない。……それゆえ筆者には、ハイデガー的思惟と解釈学的思惟とのより適切な結びつきの可能性を探り、そこから解釈学的思惟に対して哲学的内実を現代に可能な仕方で取り戻そうとすることが、さしあたっての課題となったのである。しかしそれはまた、同時にハイデガーの思想に対して解釈学的視点から反省を加える試みでもあった。」

つけ加える言葉がないくらい、明確に限定された論点である。しかしその分析作業は、ハイデガーの思惟と解釈学的な思惟とをそれぞれがおのれの限界に接する地点で批判的に交差させるというにとどまらず、つねに最終的には、「哲学的に思惟するとはどういうことか」という問題、あるいは現代における「哲学」の可能性という問題に収斂してゆく。著者の論考が、（広い意味での）現象学的＝解釈学的思考になじみのない読者にもある種の喚起力をもって迫ってくるのは、ときに密教的とすらいえる思考の法悦に堕すことが往々にしてありうる哲学的思考に《隠喩》が気づかれないまま侵入してくることをできるかぎり回避しようという思考態度もさることながら、やはり、著者の問いがつねに、「現代においてなお固有の哲学的思惟が可能か」という根源的な問いに接ぎ木されてるところからくるようにおもわれる。実際、思惟というものがその根底からして歴史的に制約されたものであることを解釈学的哲学から突きつけられてきた著者にとって、〈知〉の有限性が、それ自身が有限的なものである〈知〉そのものによって掘り起こされるということの深い矛盾に直面することなく、「哲学」というものが、他の諸学から明確に区別される（しかもより基礎的な）学のジャンルを形成すると今なお考えうるというのは、無感覚を超えてもはや一種の瞞着と映るにちがいない。

「超越と解釈」という表題からすでにうかがわれるように、著者の思考は、《超越》と《有限性》という経験の二つのコントラスティヴな契機のあいだを、強度の緊張感をもって往復する。出発点となるのは、われわれの世界理解、そしてそういう世界と関わっている自己自身の理解が歴史的な制約のなかで働きだすことへの反省である。しかも、そういう反省それ自体もさらに歴史的制約の下にあるという、いわば自乗された反省である。世界がつねにすでに解釈されたものとして一定の意味地平のなかへと現出してくること、そしてそういう地平への反省は、たんなる歴史的＝文化的な地平であるだけでなく、さらに「それらの意味に先立って、そもそも存在者をそのような存在者として出会わしめている地平」である存在論的地平としても問われねばならないこと、それが有限性や地平性、歴史性という概念とともに明らかにされるのであり、そういう思考の遂行そのものが「解釈学」としての Philosophieren であるとされる。

しかし、こうした「被解釈性」（世界が理解の地平としてすでに先行的に解釈されてあること）をまさに被解釈性として解釈するときの、その「として」が帰属する次元を解釈学的に確保すること（あるいは、そうした被解釈性の地平の外へ出ること）は、解釈を可能にしている意味地平そのものが立ち現れてくる場（地平の「根底」）そのものを解釈の対象とすることはできないがゆえに、不可能である。それだけではない。世界の現出がまさにそういうものとして可能になってくる場への問いの発生、つまり、理解にとって自己の地盤としての「被解釈性」が問題化してくるということは、とりもなおさず「被解釈性」自体の変容として、すなわち世界と自己の存在の変容として生起してしまう。解釈学的思考はこうしておのれの臨界点に接することになる。

第一章から第三章にわたって詳細に論じられるこうした《有限性》の諸契機は、さらに第六章では、哲学的な思考が歴史的なものに制約されていることと、歴史を超えるものにたえず関わっていることとの、相互媒介的な運動の分析として展開される。そして、世界が現出するその意味地平は歴史的に多様であるが、その地平自体の根拠については「無」であるという欠如的な仕方でしか示されえないとしながら、「このような有限性に根づくことが、逆に多様な意味地平に対する開放された意識を可能にするのだ」と著者は言う。

こうしてもう一つの問題、《超越》の問題が前面に出てくる。それは、思惟が、みずからがよって立つ地盤ないしは基底となる次元へと問いを向けることによって発生してくる問題であり、すなわち「有限的な解釈学的思惟が、みずからの有限性をそれ自身の思惟の限界内で、その基底からどのように自己認識にもたらすか」という問題である。二十世紀の哲学に関して、その「言語論的転回」ということがよく言われるが、言語という、思考の媒体そのものへの反省を解釈学的思考は現代哲学のさまざまな試みとともに共有しているのであって、解釈学的思考はそういう媒介が起こる場そのもの（「存在論的な場」）への問いにより強く問いを向ける。あるいは、深める。地平というよりも、その根拠としての存在論的な場そのもの（あるいは存在論そのもの）が転化し、変容してゆくような次元に問いが向けられるのである。著者が歴史を論じるときも、言語を論じるときも、存在を論じるときも、眼はあきらかにそういう次元に向けられている（「付論」の《存在》論では、存在は「存在者を明める場所」であるとともに、そういう場がたえず生起するというその「動性」そのものをさすことに注意が喚起されている）。

本書のこのようなモティーフとともに、評者が強く関心を引かれたのは、『存在と時間』の公刊に先立つ一九一九年から二三年にかけてのフライブルク時代の講義録の位置づけをめぐる議論である。この時期「事実性の解釈学」(Hermeneutik der Faktizität) として構想されていた存在論から、『存在と時間』で取り組まれる（存在一般の意味への問いの地平を開くための）基礎的存在論への移行、そこにモティーフのどのような転換、あるいは思考のどのようなずれが見いだされるか、「情態性」、「死」、「時間性」という新たな概念の導入が何を意味するかを、ペゲラー、ベッカー、ゲートマン、キシールらの解釈を区分けしながら、きわめて詳細に跡づけている部分である。カントをはじめとして近代哲学にみられる「事実」概念の多義性の指摘も明快である。

さらにもう一点、第五章で展開される、近代哲学における〈超越〉概念（ならびに〈超越論的〉という概念）の帰趨を跡づけた議論も哲学史的解釈としてきわめて啓発的である。著者によれば、近代的な思惟において、思惟が関わる〈超越〉は一種の二極分解を引き起こす。つまり「思惟に対する外界の超越性」と「表象されたものに対する思惟の超越性」とへの分極化である。し

かしそこにおいては、「思惟の有限性と、主体としての思惟に割り当てられた超越性とが外的な関係に留まって」いる（これはまさに、主体における《有限性》と《超越性》という、先に指摘した二契機の分離である）。しかしこのあいだに真に内的な関係がありうるとすれば、「〔その〕超越（trans-）は、経験にとって、それを可能にするという意味で原理的に先なること、超えることを、しかも経験の彼方にではなく、経験それ自身の成立する場所そのものへと（その意味で、経験の根底へと）超えていくことを意味する」はずだという。著者がハイデガーの思惟と解釈学的哲学とをあくまで相互批判的に、相互媒介的に継承していこうとするのも、超越論的哲学がこのように、「その対象の開示が常に自己自身の開示にして基礎づけでもあり、かつまたそうであらざるをえないという一種の循環的運動のうちにその特性を有している」かぎりにおいて、解釈学的であらざるをえないからであろう。あるいは、「対象としての存在者一般に対する主体性の存在論的優位としての超越」を破棄しようとしつつも、なお解釈学が超越論的哲学のひとつの極限として、現在、われわれの前にあるからであろう。その意味で、本書は主体性（Subjektivität）の哲学という位相における近代哲学の大いなる総括の書ともなっている。

（大阪大学文学部助教授）